

# 墓じまひ

赤谷慶子

高齢化進む中、家の墓如何に始末せんやの儀は尠すくなからぬ人々の頭を悩ます種にてぞありける。最近の若者は墓参りにも参らずと聞く。我家の墓は府中のカトリック墓地にあり。塔婆等は立てず、墓石の形も外國の墓地に類似したるこの墓地を管理するは關口に所在する東京カテドラル（大聖堂）なり。その墓地には母の實家の墓と隣家の従姉の實母の墓もあり。都心を隔たること些かなれば、車なくは行き難く、それがし墓守に任せられたるが如き態なり。必ひつじやう定年三回は墓参す。三つの墓所の掃除をし、花手向け歸路に着くも、三つの掃除となると真夏は汗にまみれて見苦しき様なり。高齢になりせば體力的に限界に達す、子もなければ、我が亡き後、如何にか成り果てん。母の實家の墓も嫁いだ従姉管理したるが、そこには祖父母と叔父夫妻納められ、この後、入る人もなし。このままにては、無縁佛と化するの外なし。我家の墓には現在元氣なる九十六歳の母を最後に納めその後如何にせんやと胸を痛めてあり。

關口の大聖堂内にある墓地管理事務所に問合せ、集合墓地の所在聞く。墓地中央に聳そびゆる大きな十字架の下にありといふ。數年前まではピエタ（十字架より降ろされたるキリストを抱きかかふる聖母マリア像）なりき。ある日突然十字架に代はりたりき。そこに収納するには、骨壺より麻の布に骨を入れ替へ、その袋を集合墓地に納むるなり。墓石なく、大聖堂の管理事務所内の「登記簿」のごとき所に氏名記載せらるとの由。かくするにあらで法はなしと斷ずれど、いささか安からざるの儀あり。一九五〇年代半ば父フランスに赴任せし直後祖父は他界す。祖父死亡せし時代は未だ土葬なりき。管理事務所によると骨壺に納まりたるにあらずば、集合墓地には收容するを得ずとの由。従ひて、墓を掘り返し、骨残りてあらば壺に移す。大量に骨見つからば火葬してより壺に入るといふ工程を要すと告げらるるの段ありき。

母に談かたひたるに、自分存命の間に、本家の長男の嫁として、墓を綺麗に整理せまほしと言ひて、すなはち墓を掘り起こさせたり。すでに六十年経ており、骨は見つからざりきと石屋より連絡ありき。従ひて土を壺に入れて納骨せりと報告ありき。父の末弟は十六歳にて特攻隊に入隊す。台灣沖にて空母と共に撃沈され、壺には少量の土を見るのみ。祖父母、父、叔父の四名の壺納骨せられたり。このち母の納骨すましたらば、集合墓地に入るを請ひ、我家の墓は更地にして東京大聖堂へ返納せんとす。これにて永代供養となる。我家の墓の發掘作業は終はり、草止めを施し、玉砂利を敷き詰め元通りになりき。

この事を聞き及びし従妹たちは同様にする事を決意したりき。母存命の間に墓じまひ整ひ、安堵したりき。  
(平成三十年十一月二十二日受附)